

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520244

研究課題名（和文）英文学の基礎知識の構成と習熟に関する研究

研究課題名（英文）Constructing Basic Knowledge of English Literature for Students' Literary Advancement

研究代表者 澤田 敬人（SAWADA TAKAHITO）

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20254261

研究成果の概要：英文学を学ぶ大学生が段階的な英文学の習熟を可能にするために精選した文学史の知識、作家・作品の知識、社会文化の知識、批評方法・文学理論の知識から成る英文学の基礎知識を構成した。この目的の達成に向けて、配列する基礎知識が標準の保証を得るように、通常講義によって英文学者であれば暗黙的に共有している知識を土台とする視座を定めつつ、英文学を通観した概説書、網羅的な辞書の最新版を利用し、さらに批評やペダゴジーに関する理論の研究成果を集め、基礎知識の標準化を進めてこれを e-learning の試験出題の形でデジタル化して、CD-ROM に収めた。次に、基礎知識の習熟を測定する観点から、英米文学史を学ぶ大学生が検定試験としてコンピューター実習室で受験した。これを受験する際、習熟の意欲、英文学のイメージをアンケートの手法で尋ねてデータを集めた。これら一連の研究を評価するための企画審査会を開催した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：英連邦教育・文学

科研費の分科・細目：人文社会系 人文学 文学 英米・英語圏文学

キーワード：英文学 教育学 教育工学 e-learning

1. 研究開始当初の背景

植民地統治と文学教育の関係を明らかにするなどの英文学の文化研究が進展するに従い、英文学の創始と発展を正確に知るには、イギリス旧植民地を含めた英帝国・英連邦の学び手の存在への視点が必要であることがわかってきた。1990 年代には、大橋洋一著『新

文学入門』（1995 年、岩波書店）、川口喬一編『文学の文化研究』（1995 年、研究社）テリー・イーグルトン『文学とは何か』（翻訳 1997 年、岩波書店）に刺激を受け、英文学の読者すなわち学び手の存在に気付かされ、同時に日本の英文学研究教育者の眼前で実際に学ぶ人々の存在が重要であることを知った。最

近ではロバート・イーグルストーンが『「英文学」とは何か』（翻訳 2005 年、研究社）で文学理論の重要性を説く中で、「自分自身と他人について考え直す力こそが、英文学というものをこのようにかげがえのない学科目にしていく理由の一つ」と述べている。英文学の教育について考え続けてきた研究教育者としては、教師としての自分自身と学び手について考え直す力とともに、学び手が学び手自身と他者について考え直す力を獲得することが、英文学を学ぶ意味を堅固にするための目標になると確信するに至った。

そこで、英文学の教育について検討する中で、まず、英文学の基礎知識をどのように構成すればいいかというテーマに取り組む必要を感じた。学び手がテキストの批評を行う前段階において、この基礎知識が批評をたやすくさせる道具になるかもしれない。この基礎知識は、研究教育者が最小限必要なものであると確認した文学史の知識、作家・作品の知識、社会文化の知識、批評方法・文学理論の知識で編成されることになるが、習熟すべき知識の配列について、学び手がこれらの知識の編成をどのように認識し、習熟への動機を持ち、実際の批評に役立てる機能性を持つかを探究する必要がある。これにより、学び手にとっての基礎知識の意味が明確にわかるのではないかと思われる。

2. 研究の目的

英文学を学ぶ人々への考察を行うことで、英文学教育学というべき領野を立ち上げ、英文学のディシプリン全体としての発展を目指す。そのために、英文学の基礎知識といえる範囲と内容を確定し、それを検定試験という形で学生に提供し、その試験の解答の状況について、英文学教育に通暁した者によって分析・検討し報告する。これまでも英文学

の教育面についての考察は多々あったが、その多くがイギリス文学やアメリカ文学という当該国のナショナルアイデンティティに関わるもので、それと関わりつつも独自の視野から、アジアに位置する日本における英文学の教育面を考察することが重要であると考える。その意味で、昨今アカデミズムにおいてポストコロニアル状況を考察しそれに基づく研究が行われることが増えてきたが、英文学の教育面においても植民地主義的な英文学経験を視野に収めながら、日本の学習者にとっての英文学を学ぶ意味、これを逆から考えれば日本の英文学研究者が英文学を教育する意味を、たんなる啓蒙的理念に留まらず、ペダゴジカルな教育研究として明らかにし、新たな英文学ディシプリンの構築に貢献することが目的である。

英文学を学ぶ人々への考察を抜きにして、今後の英文学の研究教育を劇的に進展させることは難しいという考え方のもと、学ぶ者が段階を踏んだ英文学の習熟を可能にすることができるように、英文学の基礎知識を構成し、学ぶ者がどのようにそれらに習熟して高度な批評の段階へ進んでゆくのかを知ることが、本研究の全体構想であり、研究組織にとっての大きな動因である。

3. 研究の方法

標準化された基礎知識を構成するために必要となる英文学を通観した概説書、網羅的な辞書類、文学理論を利用した批評の成果の収集を、研究開始後に始める。同時に、大学における通常の英文学講義を通じて英文学者が暗黙裡に共有する英文学の基礎を視座として定めることを行い、これを研究組織の研究者4名が、基礎知識の出題の形で明示する。さらに詳細に役割を明確にするならば、研究代表者の澤田、研究分担者の長瀬、榎が

出題の形で、基礎知識を構成し、研究分担者の青山が、後の e-learning のコンピューター支援テストの形にうまくおさまるよう調整を行う。デジタル化の作業は、研究代表者の澤田と研究分担者の青山が集中的に行い、研究組織のある大学の試験会場のセッティングと学生への案内もこの両名で行う。試験を行うことの学生への通知ならびにその試験準備の案内、例えば読むべき書物の案内は、長瀬と榊が行う。

アンケートの質問内容の選定は研究組織 4 名で行うものの、調査方法の定型に精通した澤田と青山が最もアンケートにふさわしい形にするために調整を行う。学生が受験した試験の成績データとアンケートによるデータをまとめる作業を澤田と青山が行う。

これら一連の研究を評価するための審査会に備えて、英文学を専門とする識者を招く会場と資料の準備を行う。この準備段階すなわち審査会開始の 2 ヶ月前までに評価者への参加依頼を済ませる。審査会においては、これまでの成果をコンピューターによるプレゼンテーションによって発表できるようにする。進行と発表はともに澤田が行う。評価者すなわち審査会長からの発言を記録する。

本研究課題は平成 19 年度と 20 年度の 2 ヶ年計画であるため、平成 19 年度の成果を挙げた後に、平成 20 年度の研究の調整を行う。2 年間で 4 度にわたるデジタル英文学検定試験の作成・実施・結果分析ならびにこれらの評価の実施を行うが、2 年目には英文学検定試験をより原則的に標準化されたものにしていく過程を踏むことをまずは計画する。

ただし検定試験の作成は、英文学の教育について長年の熟達した実践に基づくことで、より適切なものが出来上がるという仮説のもと、標準化を目指すことそのもの可否を考えることになろう。

このことは、まず英文学の教育経験の浅い者が検定試験を作成し、それを熟達した教育経験の有る者が修正する中で明らかにされるはずであり、これを本研究課題では、質の高い実践知という観点からフロネシスと呼ぶことにし、賢慮を伴う実践を意味するプラクシスにおいて発現するものであるとする。審査会における評価に際し、「英文学のプラクシス（高度実践知）」および「英文学のフロネシス（高度実践知形式）」と題して評価者に供するプレゼンテーションを行うことにつなげることを目論んでいる。

これらプラクシスによるフロネシスの活性化を期し、活性化された実践知が、英文学の基礎知識の構成に際して、高度な実践的標準化を目指すよう方向付けを行う。まず、評価者が、検定試験を作成した英文学者と（たとえ所属機関は異なっても）同僚性を帯びる熟達した英文学教育者であるという意識を持つよう企図する。その方法は、評価者の評価内容を踏まえて、次なる検定試験の作成の指針を定め、実際により高水準の検定試験を作成することである。そして、検定試験を実施し、さらに同僚性を帯びた評価者から評価を受け、これを無限の習慣のループとなるようにすることである。この評価者と本課題研究分担者との間で同僚性を帯びるためには、英文学教育について十分な知識、方法、技量のある熟達さを示さなければならないため、相互に刺激となって英文学コミュニティ全体の発展に資するというわけである。ここにいう熟達とは、自身の講義の内容の良し悪しであることは当然のこととして、本研究課題で特に重視することは、学習者の学習スタイルや志向を十分に把握し、それらを踏まえて適宜講義内容を点検することであり、これらを英文学のディシプリンの枠で適切に行うことである。そのため、検定試験の作成

と実施と結果分析に対する評価を全国レベルで求めてゆく。

本研究課題は、英文学の発展にとって重要な学び手について実証研究として目立った研究成果が学界にない中で、学び手にとっての具体的な学びの道具を作り、その道具を用いて示した結果に対する研究である点に独創性が認められよう。その道具も、英文学の研究教育者が共通して基礎知識と認めることができる妥当性を持つもので、研究成果が発表された後、汎用性が認められる可能性がある。この場合、基礎知識を配列した試験に汎用性があるにしても、重要と考えられることは、本研究と同じように英文学の学び手に着目した研究教育者が、実証研究を行って成果を発表しあう研究教育者のネットワークにつながる可能性を有していることである。これにより同じ関心を持つ研究教育者が増えれば、学術研究のパラダイムが築かれることになり、英文学教育学という専門的な研究領域が出現することになる。この領域は、文化研究の成果から英文学教育の歴史的変遷と歴史的な意義について知識を与えられ、現実の英文学を学ぶ者が、これまでの英文学における知性の蓄積を相続し、最近の英文学の方法に習熟することを通して、知的発達と人間的成長を研究教育者とともに成し遂げ、その様態を研究教育者が実証し記述することで、成り立ち得るものである。

4. 研究成果

英文学検定試験と審査会により、大学で英文学を学ぶ学習者が修得するべき基礎知識をいかに構成し、その習熟のために何が必要なのかを検討した。

e-learning のシステムに付属するソフトでデジタル化を施した検定試験を、コンピューター実習室にて大学 3・4 年生対象の英文

学史受講生に対し年間 2 回（2 年で 4 回）行った。

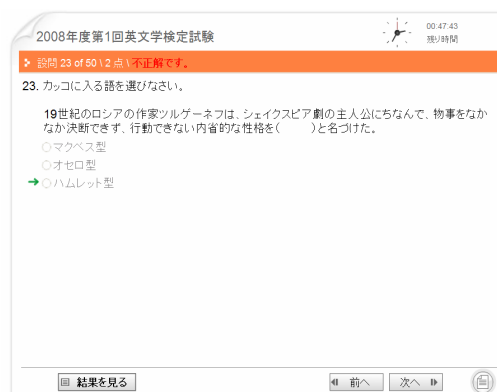


図 1 デジタル検定試験の受験用画面：解答方法も完全にデジタル化され、その場で正解と得点がわかる。

カッコ内の語として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

A. L. Huxley の *Brave New World* (『すばらしき新世界』) は、近未来社会において、科学技術の発展が理想社会の実現につながらず、科学技術の肥大化によって徹底した管理社会の誕生をまねいた様子を描いて、理想と実体の落差を予見している。この種の小説を () という。

- A anti-novel B bildungsroman C dystopian fiction D picaresque novel

図 2 出題の例：「穴埋め」でジャンルを問うもの。ほかにも「並べ替え」や「組み合わせ」の出題を行った。

一つの検定試験が最終的に作られるまでの経過としては、既存の英米文学辞典・文学概論書を参考にして原案作成した英米文学講義非担当者のものと、英米文学史の講義を長年担当し、講義における学生の理解を十分に承知したものからの原案とのあいだのやり取りをファイルに収め、基礎知識の構成が成されるまでに作成者間で合意に至る経緯としての記録とした。2 名の評価者に対してその全体を評価のために提示した。その審査

会に「プラクシス（の深化）」「フロネシス（の深化）」という名称を与えて実践知に基づく英文学の基礎知識の構成に関わるスタンスを明瞭にした。

英文学非熟達教育者からの出題第1提案：
「はい」か「いいえ」で答えなさい。
『唄とソネット（Songs and Sonnets）』の作者はジョン・ダン（John Donne）である。
（正答「はい」）
熟達教育者からの返答：
ダンについては、詩集の名を問うより、表現の特徴を問うがよいかと思います。できたら私の問題を採用してください。

図3：非熟達教育者と熟達教育者の実践知の質的な違いを表すやりとり（その1）

英文学非熟達教育者からの出題第1提案：
作品名と発表の年代を組み合わせなさい。
『カンタベリー物語（The Canterbury Tales）』＝14世紀
『オセロー（Othello）』＝17世紀
熟達教育者からの返答：解答の仕方にもよりますが、17世紀のごく初頭の作品について、書かれた世紀を問うのは少し難しくないでしょうか？それから、たしかカンタベリー物語は、1400年には亡くなったチョーサーの遺稿を整理したものが世に出たのではなかったかと思います。それに当時の本は手書きで特定のサークル内で読まれたと思いますので、「発表の年代」を問わない方がよいと思います。あるいは問題全体を「書かれた年代」にしたほうがよろしいかもしれません。

図4：非熟達教育者と熟達教育者の実践知の質的な違いを表すやりとり（その2）

熟達教育者と熟達教育者による出題の質的な違いである。非熟達者による出題の根拠は、辞典類・基本書の権威に準拠するものであるが、熟達者は、正当性の根拠を、英文学への深い理解のほかに、現実の大学生の学びの样態に依拠する。驚くほどの実践知の差が見て取れるばかりか、熟達者には範を示すリーダーシップもある（図3「できたら私の問題を採用してください。」）。

審査会では、基礎知識の標準化に向けた示唆のみならず、現状以上に英文学教育者の実践知を高める方策が示され、本研究課題の当座の目標を超える知見が得られた。申請当初は、審査会開催の目的を標準化に定めていたが、探究を進めるうちプラクシス／フロネシスの語に示されるように、熟達した英文学教育者による実践的知識の検討と共有に主要な目的が変化した。

検定試験が定着するにつれ、学生に高得点をあげる者が増えた。これは学生の習熟が、熟達した教育者のいる教育機関のローカルな文脈に依存する可能性を示している。熟達が意味を成す場を明確に示すことができるものと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①澤田敬人、ナショナルバイオグラフィーのホワイトネス—編集者キース・ハンコックに浸潤するヤン・スマッツの全体論、オセアニア研究（オセアニア出版社刊）、別冊、1—20、2008、査読有

②澤田敬人、テレビと社会関係資本—アメリカ・オーストラリア・日本、ことばと文化（静岡県立大学英米文化研究室）、11号、15—24、2008、査読無

図3、4で示されているのは、英文学の非

③澤田敬人、オーストラリアにおける異文化包摂の読書、言語文化学会論集（言語文化学会編）、29号、75-88、2007、査読無

〔学会発表〕（計4件）

①澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、英文学フロネシスの深化—「英文学の基礎知識の構成と習熟に関する研究」企画研究審査会平成20年度第2回（会長：日本医科大学・中村哲子）、2009年2月21日、日本医科大学

②澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、英文学プラクシスの深化—「英文学の基礎知識の構成と習熟に関する研究」企画研究審査会平成20年度第1回（会長：福岡教育大学・古賀元章）、2009年1月30日、静岡県立大学

③澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、英文学のフロネシス—「英文学の基礎知識の構成と習熟に関する研究」企画研究審査会平成19年度第2回（会長：静岡大学・森野和弥）、2008年1月30日、静岡大学

④澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、英文学のプラクシス—「英文学の基礎知識の構成と習熟に関する研究」企画研究審査会平成19年度第1回（会長：福岡教育大学・古賀元章）、2008年1月25日、福岡教育大学

⑤澤田敬人・青山知靖、Codifying the Unstructured Textual Data on University Students' Needs toward Better Computer Use through Text Mining Methods、Innovative Collaboration for Edutainment Park 2001 International Conference for Media in Education、2007年9月6日、Hanwa Resort Conference Hall, Busan, Korea.

〔その他〕

①澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、「CD-ROM 英文学検定試験2008年度第2回（利用ソフトウェア：株式会社キバン製クイズク

リエイター）」、2009年2月4日

②澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、「CD-ROM 英文学検定試験2008年度第1回（利用ソフトウェア：株式会社キバン製クイズクリエイター）」、2008年7月22日

③澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、「CD-ROM 英文学検定試験2007年度第2回（利用ソフトウェア：株式会社キバン製クイズクリエイター）」、2008年2月3日

④澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、「CD-ROM 英文学検定試験2007年度第1回（利用ソフトウェア：株式会社キバン製クイズクリエイター）」、2007年7月23日

⑤澤田敬人・長瀬久子・榊正子・青山知靖、あなたも英文学博士：県立大沢田准教授「教養深めて」—パソコンで初「検定」、静岡新聞2007年7月24日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤田 敬人 (SAWADA TAKAHITO)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：20254261

(2) 研究分担者

長瀬 久子 (NAGASE HISAKO)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：90405150

榊 正子 (SAKAKI MASAKO)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：80046218

青山知靖 AOYAMA TOMOYASU
静岡県立大学・国際関係学部・助教
研究者番号：50295549

(3) 連携研究者（該当なし）